

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 5 月 29 日現在

機関番号：14101

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K14015

研究課題名（和文）「探究的な学習」を組織するために必要な資質・能力を育む教員養成型対話的実践の開発

研究課題名（英文）Development of dialogic teaching method to nurture competencies for organizing Inquiry Based Learning

研究代表者

前原 裕樹 (MAEBARA, Yuki)

三重大学・教育学部・准教授

研究者番号：00755902

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、教員養成段階教育において、総合的・探究的な学習を組織するために必要な資質・能力の向上に寄与できる対話的教育方法の開発を行った。具体的な研究成果は、次の諸点である。

1)対話型論証をベースとした、教育学分野における探究的な学習のカリキュラムを開発した。2)総合的な学習の時間に関する事例シナリオ型PBLのカリキュラムを大学院生と共同で開発した。3)カリキュラム評価の方法として、コンセプトマップ評価を導入し、学習者の被教育経験を通じた総合的な学習の時間の意義と課題および本カリキュラムによる学習者観の変容過程を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

総合的・探究的な学習の時間において、被教育経験を通して学生らは十分にその意義と課題を理解しておらず、そのため教師になった際に探究的な学習を組織するための具体的なイメージを有していなかった。そういった中で本研究においては、2つの対話的な教育方法を開発し、それを実際に試行した。加えて、それらの学習効果を把握するために、コンセプトマップによる自己評価活動を実施した。その分析の結果、総合的・探究的な学習の教材開発およびカリキュラム遂行に関する具体的なイメージを有することを促すことができたこと、児童生徒の学び支援のあり方に関する学生らの「観」の変容を促すことができたこと、が明らかになった。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is to develop dialogic teaching method to nurture competencies for organizing Inquiry Based Learning. In study 1, I created learning tasks about the OECD's Programme for International Student Assessment Results with Dialogical Augmentation. In study 2, I developed new dialogic scenario for the period for integrated studies. The results teacher Education Students exchange their concept of the period for integrated studies by taking in others concept.

研究分野：教育方法学・カリキュラム論

 キーワード：総合的・探究的な学習の時間 対話的教育法 対話型論証 対話的事例シナリオ 資質能力 教員養成
 コンセプトマップ 観

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

「総合的・探究的な学習」の起源は、20世紀初頭からの学習者による能動的で実践的な学習を主張する新教育の流れに位置し、国内においては大正自由教育の中で、様々な実践が行われた。木下竹次が実践した奈良女子大学附属小学校における合科学習などは、その一例である。

以来、「総合的・探究的な学習」においては、数多くの実践や研究が積み重ねられてきた一方で、昨今の探究的な学習の実態に関し、松下佳代(2019)は、「生徒の探究活動で多いのが、問いの掘り下げが弱いまま、ネットで調べてきたことをまとめて発表して終わり、というタイプだ。だが、問題を設定し、それに対して複数の主張を一つながりに関連づけることで一定の結論を導くのでなければ、本当の意味での探究とはいえない」と指摘している。

本当の意味での探究的な学習が行われていない要因の1つとして、児童生徒を指導する立場である教師自身の被教育経験における「探究的な学習の経験の無さ」が考えられる。教師が行う授業実践においては、その実践の核となる「観」の存在が指摘されており(森脇、2011)これらの形成に暗黙的に影響を与えるものの1つが教師自身の被教育経験である。もしも教師自身の「探究的な学習」経験が不十分であり、そのために「観」が十分に形成されていない場合は、「意味ある探究」を組織することは困難である。よって、教員養成段階において、学生が暗黙的に形成している「総合的・探究的な学習」に関する「観」の自覚を促したり、学習によってその変容を促したり、新たに形成できるような再学習の場を設定する必要がある。

上述した「観」の自覚化やその変容を促すことで、教師の資質・能力を高める実践がいくつか展開されている。これまで筆者は、事例シナリオを用いたPBL学習により、状況や他者との対話を作り出すことで、学習者の「観」を把握し、その変容を促すことを試みてきた。(山田ら、2018)

しかしながら、「総合的・探究的な学習」を指導・実践する上で、どのような資質・能力、および実践の核となる「観」が必要なのか、また養成段階にある学生は、被教育経験を通じてどのような「観」を形成しているのか、そして、どのような方法によってその「観」の変容を促すことができるのか、この点については部分的にしか明らかになっていない。

それでは、「総合的・探究的な学習」を指導・実践するために、教師にはどのような資質・能力および実践の核となる「観」が必要なのだろうか。この点については、まず「教師の指導性」に関する研究が参考になる。「総合的な学習の時間」における「教師の指導性」について、大内美智子(2009)はその重要性を強調し、その力量を3つにまとめている。その指摘の中で、「総合的・探究的な学習」において特に重要と考えられるのは、「子どもの内に問いや葛藤を生み出し授業を展開する力」である。これが重要である理由は、児童生徒がグループや個人で学習に取り組む際に、当事者性やどうしても考えたり解決したいという切実性がなければ、探究を深めていくことは困難だからである。つまり、「総合的・探究的な学習」においては、児童生徒が探究テーマについてどのようにしたら当事者性や切実性が持てるか、という観点が極めて重要といえる。

次に、教員養成段階において、学習者の「観」の自覚化や変容を促すにはどのようなことが必要なのだろうか。現在の教員養成段階においては、教師の専門性を「省察」や「リフレクション」と捉え、それらを促進する方法の開発がいくつか実践されてきている。(例えば、渡辺貴裕・岩瀬直樹、2017)

これまで、「総合的・探究的な学習」の理論と方法に関する分野においても、小中高等学校で積み重ねられてきた意味ある総合的な学習や探究的な学習の実践を紹介したり、児童生徒になったつもりで模擬的実践を体験したりするような授業は展開されてきた。しかし、意味ある探究的な学習の模擬的体験や方法などを単に学ぶだけでは不十分である。なぜなら、学生自身が被教育経験によって暗黙的に形成してきた「総合的・探究的な学習」に関する「観」を、自覚したり変容したりするには、以下のような質の高い学び経験が必要だからである。

石井英真(2017)は、「文化的な実践そのものの知的洗練を通して学びの文脈固有性や豊かさを追求しつつもその文脈に閉じない汎用性のある学び」の重要性を指摘している。石井の指摘を踏まえれば、教員養成段階において、学生の発達段階や興味関心に沿った「総合的・探究的な学習」を実践することでそれらを学び直す場を設定し、自身がこれまで受けてきた「総合的・探究的な学習」経験との齟齬などを自己や他者とのあいだで生起させることにより、学生の「観」の変容が促され、「総合的・探究的な学習」を指導・実践する力を育むことが可能となるであろう。

引用・参考文献

- (1) 石井英真「資質能力ベースのカリキュラム改革をめぐる理論的諸問題」『国立教育研究所紀要』第146集、2017、pp.109-121.
- (2) 大内美智子「学習の質を高める教師の指導性」田村学・原田信之『リニューアル 総合的な学習の時間』北大路書房、2009、pp.77-79.
- (3) 松下佳代「中等教育改革と教育方法学の課題-資質・能力と学力の対比から-」日本教育方法学会編『中等教育の課題に教育方法学はどう取り組むか』図書文化、2019、p.16.

- (4) 森脇健夫「授業研究方法論の系譜と今後の展望」田中耕治・森脇健夫・徳岡慶一『授業づくりと学びの構造』学文社、2011、pp.37-87.
- (5) 山田康彦ほか編『PBL 事例シナリオ教育で教師を育てる 教育的事象の深い理解をめざした対話的教育方法』三恵社、2018.
- (6) 渡辺貴裕・岩瀬直樹「より深い省察の促進を目指す対話型模擬授業検討会を軸とした」教師教育の取り組み」『日本教師教育学会年報』26号、2017、pp.136-146.

2. 研究の目的

本研究は、教員養成段階において、教師を目指す学生が「総合的・探究的な学習」を構想することができる資質・能力を育むための実践開発研究として、以下3つを目的とする。

第1に、「総合的・探究的な学習」を実践するにあたり、教師として必要な資質・能力および実践の核となる教師の「観」(授業観等の多様な観の集合体。授業要素に一貫性を与えるもの)を明らかにする。

第2に、被教育経験の中で、教師を目指す学生が「総合的・探究的な学習」に関して、どのような「観」を形成しているのかを明らかにする。

第3に、学生の発達段階に応じた「深い学び」のある探究的な学習実践を開発・実践し、学生の「観」の変容を促す。

3. 研究の方法

「総合的・探究的な学習」の実践に関する資料を授業参観等により収集し、授業理論を構築するとともに、「学習論」や「対話論」を中心とした理論検討を行い、「総合的・探究的な学習」を指導・実践する際に必要な「資質・能力」および「観」を明らかにする。また、教員養成課程における大学生の発達段階に応じた「深い学び」のある探究的な授業実践の開発も行う。実践開発については、教育学に関して「意外性(普段何気なく見たり思ったりしていた事柄の裏側に、新発見や予想外があること)」を含んだテーマをいくつか設定し、学生が自身で問題・課題を発見し、その問題・課題解決のために学生が自分で設定した方法で調査・探究(独自学習)し、その成果をグループや全体で質疑応答(相互学習)したりする学習過程を通して、教育内容の理解を深めるとともに、探究的な学習を学び直すことのできるような実践を構想する。加えて、現職の教員と協働で対話的事例シナリオを作成し、それらを学生に提示し、小グループで探究的に学習できるように実践を開発する。

上記で開発した実践を実際に行い、学生の学びや「観」の変容を可視化する。可視化の方法は、パフォーマンス評価やルーブリック評価、コンセプトマップ等を複合的に活用し、事前事後の「観」の変容を明らかにする。特に「学習評価」に関して、学生の中には評価を「単なるチェック項目」や「評価のための評価」だと認識しているものも一定数見受けられるため、そういった学生の評価に関する「観」の変容を促す。具体的な方法として、ルーブリック評価については、パフォーマンス課題に関する「モデレーション」を実施し、自分たちでルーブリックを作成したり、学習の前後に「コンセプトマップ」を作成・比較することで、自身の学習の深まりを自己評価させたり、それをもとに相互評価させたりする。そういった学習を通して、学生の「総合的・探究的な学習」における評価に関する「観」の自覚化・相対化を試みる。

4. 研究成果

第一の目的である「総合的・探究的な学習」における教師に必要な資質能力については、理論研究の調査過程および教職大学院に所属する現職教員院生と協働で地域の特性を生かしたカリキュラムを開発する過程で、「教材を構成する力」および「同僚や地域および児童と調整しながらカリキュラムを開発する力」の2点が特に重要であることが明らかになった。

第二の目的である被教育経験の中で、教師を目指す学生が「総合的・探究的な学習」に関して、どのような「観」を形成しているのか、については、授業における事前コンセプトマップを通じて、多くの学生が「授業に関する具体的なイメージを有していないこと」「総合的な学習の意義を感じられていないこと」などが明らかになった。その一方で、多くの学生が「学校以外の日常経験においては、探究的な学習を経験できていること」も明らかになった。

第三の目的である学生の発達段階に応じた「深い学び」のある探究的な学習実践については、以下2つの実践を開発した。1つ目は、対話型論証をベースとした教育学分野における探究的な学習材、2つ目は対話的事例シナリオをベースとした総合的な学習の時間のカリキュラム遂行過程に関する学習材である。これらの実践を通じて、学生の「観」の変容を一定程度促すことができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

| | |
|---|-------------------|
| 1. 著者名 前原裕樹・諸岡知徳 | 4. 巻 第6号 |
| 2. 論文標題 地域の特性を生かした教科等横断カリキュラムの開発過程ーI 地区のみかん農園を事例としてー | 5. 発行年 2024年 |
| 3. 雑誌名 三重大学教職大学院論集 | 6. 最初と最後の頁 1-9 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|--------------------|
| 1. 著者名 前原裕樹 | 4. 巻 第5号 |
| 2. 論文標題 探究的な学習を組織するための資質・能力を育む教員養成カリキュラムの開発 探究的な学習に関するカリキュラム経験の編み直しの視点から | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 三重大学教職大学院論集 | 6. 最初と最後の頁 1-11 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 前原 裕樹 | 4. 巻 第4号 |
| 2. 論文標題 『観』の変容を促す実践研究の概観 - 教員養成課程における対話的カリキュラムの開発に向けて - | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 『三重大学教職大学院論集』 | 6. 最初と最後の頁 67-73 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 前原 裕樹 | 4. 巻 第3号 |
| 2. 論文標題 高大連携による探究的な学習のカリキュラム開発 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 『三重大学教職大学院論集』 | 6. 最初と最後の頁 51-58 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

| |
|--|
| 1. 発表者名 山田康彦・中西康雅・森脇健夫・大日方真史・前原裕樹・根津知佳子・守山紗弥加 |
| 2. 発表標題 『観』の変容とPBL対話的事例シナリオ教育の役割 |
| 3. 学会等名 第28回大学教育研究フォーラム |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 前原裕樹 |
| 2. 発表標題 『PBL対話的事例シナリオ教育の新たな展開1 -対人援助専門職のOJTでの活用-』 「1. 総合的な学習の時間における地域との連携 -教職大学院生との共同開発事例をもとに- |
| 3. 学会等名 第30回大学教育研究フォーラム |
| 4. 発表年 2024年 |

〔図書〕 計1件

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 前原裕樹、三重大学高等教育デザイン・推進機構・PBL教育推進プロジェクト 監修 | 4. 発行年 2022年 |
| 2. 出版社 三恵社 | 5. 総ページ数 170 |
| 3. 書名 多様なPBLの実践事例と7-Stepからの学習過程の検討 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|